

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「言葉が背負う人間」

東京都

女子学院高等学校 1年

原 万里穂

人と人をつなぐ日本語ということはどういうことであるかを考えるにあたって、私と日本語についての関係は何なのだろうかと自身に問うてみると、まず第一に母国語であるということが思い浮かぶ。生まれた時から何も考えずに学んできた言語であるし、無意識のうち身につけている。もし日本語をこれから話すな、と言われたならば私は途方に暮れるだろう。私の英語力なんて高が知れているので、日本語なしには何を表現することもできないし、他人と正確にコミュニケーションを取れる自信もないからだ。

そういうことを思うと、私にとって日本語は母国語以上にもっと私の核心に近いものではないかと思う。私が私であるには、常に言葉を通さねばならないからである。外に発信するにしても、自分の内側に留めるにしても、言葉というはつきりとした形にしなければ理解も納得もできないのだ。私の核心となっている言葉について例を挙げておく。

私の中で特に大切にしている言葉がある。どこかで聞いた「あなたが泣いて生まれた時、周りの人たちは笑った。あなたが死ぬ時には周りの人たちが泣いてあなたは笑っている、そんな生き方をしなさい」という言葉である。この言葉を聞いた時は、なぜこの言葉が自分の胸に響いたのかも分からなかったが、今ならなぜこの言葉を忘れられないか分かる。これを聞いて私は確かに目指すべき人生の在り方を見たのだ。最近進路決定のために将来のことを考えているのだが、私には憧れの職業もなく将来への期待や希望もあまり抱いていなかった。特に何がしたいということもなくて、本当にどうしようもなかったのである。しかしこの言葉に出会った時、こんな生き方をしたいと率直に思った。自分が生きていて良かったのだと最期に実感できたのなら、死ぬ時にきつと私は笑えるだろうと思う。そして私は今、何か人の役に立つような人間になりたいと思っている。相変わらず憧れの職業は見つからないが、生きていく姿勢が固まってきたように感じる。

どこの誰が言った言葉か知らないのだけれども、確かにその言葉は私の人生観を変えたと思っている。これこそが言葉の持つ力なのではないかと思うのである。言葉は脆く誤解を生むこともしばしばあるけれども、影響力を秘めたものであると実感した出来事であった。

結局のところ、私にとっての日本語は私自身の一部であり、切っても切れない絆で繋がっている人生の仲間のようなものではないかと思うのである。

そして考えを元に戻すのだが、今まで書いたことも併せて考えてみると、人と人が言葉で繋がるといのは、その人自身の一部を差し出しあうとも言えるのではないかと思うのである。ひとつの言葉という存在が媒体となって人同士を繋ぐのではなくて、人それぞれが持つその人の一部である言葉同士が表立って出会うことで人が繋がるのだと結論づけたい。だからこそ私は他者から発せられた言葉をその人のように感じ、自分で言葉を発する時には自分自身を晒しているような気分になるのである。どんな言葉にも後ろには人間がいるのである。そのことを忘れずに周りにある日本語を拾って、様々なことを吸収していきたいと思う。